

国内経済情勢

概 観

金融引締めの影響は企業金融の面にもしだいに広がりつつあるが、需給の引き締まり基調持続を背景に、商品市況は鉄鋼、繊維等の主力商品をはじめ総じて強調を示しており、卸売物価も騰勢を続けている。企業の投資態度はなお積極的のようにはうかがわれ、本年度の設備計画についてはほとんどの企業が既定方針どおり進める構えをみせている。生産、出荷は前2ヵ月著伸のあと、さすがに一服模様となったが、従来の増加基調にとくに変化があったとはみられない。また企業の年末賞与は、労働力需給の引き締まりと好業績の持続を背景に大幅に増加し、個人消費も引き続きおう盛である。

こうした経済活動の拡大に伴い、企業の資金需要は一段と高まっているが、銀行の融資態度が総じて抑制色を強めているため、企業にはしだいに金融引き締まり感が浸透しつつあり、一部には法人税の延納や設備代金の支払繰延べを図る動きもみられはじめている。

11月の国際収支は、貿易収支が大幅な黒字となったうえ、長期資本収支も若干の黒字となったことなどから、総合収支では254百万ドルの黒字と引き続き好調に推移した。

生産、出荷は前2ヵ月著伸のあと一服模様

鉱工業生産(季節調整済み)は、9月(前月比+3.2%)、10月(同+2.6%)と高い伸びを続けたあと、11月(速報)は前月比-0.2%とさすがに一服模様となった。これには自動車の損害賠償責任保

険料率引上げによる減少も大きく響いており、これまでの増加基調にとくに変化があったとはみられない。財別にみると、資本財輸送機械(トラック、乗用車)が大幅に減少したほか、生産財(化学肥料、タイヤ等)も微減となったが、その他の財は横ばいないし若干の増加を示した。

一方、鉱工業出荷(季節調整済み)も、9月(前月比+4.5%)、10月(同+2.4%)と著伸のあと、11月(速報)は前月比-2.3%の減少となった。これは月によってフレの大きい船舶の大幅減少や前記事情の自動車の減少によるところが大きい。その他では建設資材(鉄骨、橋りょう等)が反動減となった反面、耐久消費財(カラー・白黒テレビ等)は相当の増加を示した。

11月の生産者製品在庫(季節調整済み、速報)は前月比+2.4%の増加となり、製品在庫率指数(96.6)も上記のような出荷の減少からかなり上昇した。もっとも製品在庫の増加には自動車の著増が大きく響いている(自動車を除けば前月比+1.1%)。

この間、企業の設備投資の動向をみると、先行きの資金調達面の不安から、計画を見直そうとする気運も一部にみられないではないが、大勢は売上げ好調と操業率の高水準を背景に依然積極的な姿勢を改めておらず、当面44年度の計画についてはほとんどの企業が既定方針どおり進める構えをみせている。また先行指標である機械受注(10月の船舶を除く民需は季節調整後で前月比+10.4%)の動きをみても、設備投資が根強い増勢を続けていることがうかがわれる。

このようなおう盛な経済活動を映じて、労働力需給はさらに引き締まりの度を加えており、10月の求人倍率(季節調整後1.39倍、7～9月平均1.32

倍)が既往最高となったほか、来春新規学卒者についても卒業者数の減少と進学率の向上などから求人倍率(9月末現在見込み調査、中学卒 6.9倍、高校卒 4.5倍)は前年同期の調査(中学卒 6.1倍、高校卒 3.8倍)を大幅に上回っている。こうした状況下企業の好収益もあって、民間主要企業の年末賞与(日経連調べ、1人平均支給額)は前年を2割以上上回る高い伸びを記録した。

11月の全国百貨店売上高は、前年同月比 +24.2%、季節調整後の前月比で +1.6%と顕著な増勢を示し、12月にはいってからも東京百貨店売上高は高額賞与の支給による個人消費の盛り上がりなどから上伸を続けている。

卸売物価の騰勢続く

最近の商品市況をみると、主力商品では鉄鋼が鋼板類、条鋼類ともほぼ全面高となったほか、繊維も綿糸、スフ糸をはじめ総じて続伸、また非鉄金属も銅を中心に一段高となった。その他の商品でも、一部に弱気配のものもみられないではないが、化学品、石油、紙等多くの品目が堅調を示している。このような最近の商品市況の強調は、海外相場の高騰(非鉄金属)や輸出価格の上昇(鉄鋼)、安値訂正人気の台頭(綿糸)などによる面が少なくないが、多くの商品では需給がかなりの引き締まり基調を続けているため、比較的わずかな追加需要でも、市況の上伸を招いていることが注目される。こうした需給の堅調持続を背景に、鉄鋼、化学品、紙などではこのところメーカーの販売価格引上げの動きが目だっており、また原材料価格の上昇を機に、賃金コストの上昇分も含め、製品価格の大幅な引上げを図ろうとする向きもみられる。

卸売物価は、10月に前月比 +0.3%の上昇を示したあと、11月も食料品を除いて各品目とも軒並みに上伸し、総平均では前月比 +0.4%の続伸となった。この結果、卸売物価は本年2月以来10ヵ月

にわたって連騰したこととなり、この間の上昇率は+3.4%に達した(11月の前年同月比も+3.4%)。さらに12月にはいってからも、鉄鋼、非鉄金属、繊維等を中心に根強い騰勢が続いており、上旬は前旬比 +0.4%、中旬も同 +0.2%の上昇となった。

企業金融の引き締まり感しだいに浸透

11月の銀行券は、月末休日の関係もあって月中1,284億円の発行超(前年同 930億円)となった。一方、財政資金は地方交付金や米代金の支払がかさんだほか、外為会計が証券投資の流入増加などから大幅な払超となったこともあって、月中の払超額は6,433億円に達した(前年同 6,155億円)。この結果、月中の資金余剰は多額に及んだが、本行は貸出回収のほか、短期買入債券の売戻しおよび短資業者に対する政府短期証券の売却によって調整を図り、市場は通月引きゆるみをみせることなく推移した。

12月にはいって、銀行券が年末賞与の支払から大幅な増発を続けているため、財政資金の払超にもかわかわらず金融市場は繁忙裡に推移しており、コール・レートは月初から各条件物とも年利0.25%の上昇をみた。

銀行券の月中平均発行残高の前年比増加率は、11月に+19.3%(7~9月+18.2%、10月+18.1%)の高い伸びを示したあと、12月も年末賞与の大幅増加やおう盛な消費を映じてさらに増勢を強めている。

11月の全国銀行貸出増加額は、5,182億円と前年同月(3,901億円)を32.8%上回り、月末残高の対前年同月比伸び率も9月、10月+16.1%と横ばいのあと、当月は+16.3%とわずかながら上昇した。業態別にみると、長期信用銀行は前年同月を若干下回ったが、都市銀行は決算資金等一般貸出の抑制にもかかわらず、貿易関係貸出の増加などから前年同月比かなりの増加となった。また地方銀行も相当な増加となったが、ポジション面のゆと

りが少なくなっている向きを中心に貸出態度はしだいに慎重みを加えつつある。一方中小企業金融機関は総じて積極的な貸出態度を続けており、相互銀行、信用金庫とも大幅な増勢を示している。

企業の資金需要は根強い経済活動の拡大に伴い引き続きおう盛で、とくに11月、12月は好業績を映じた決算資金、年末資金の増加から一段と増高をみている。これに対し都市銀行などの融資態度は抑制色を強めているため、大企業を中心に金融の引き締め感がしだいに浸透しつつあり、このところ手持り有価証券の売却や法人税延納の事例も目だっている。とくに大規模な設備投資を行なっている企業の一部では先行きの資金調達難を警戒し、設備代金などの支払繰延べを検討ないし着手する向きがふえつつある。なお、市中銀行の貸出金利は11月も引き続き大幅な上昇をみた模様である。

この間、公社債市場では、都市銀行の債券売却は10月、11月に比し12月は少額にとどまっているが、上記のような企業の手持り有価証券売却が増加している一方、買い大手の農林系統機関や中小企業金融機関はコール・レートとの利回り対比もあり模様ながめの態度をとっているため、市況は11月末以降短期ものを中心に軟化を示している。

株式市況は、外人投資家の積極的な物色買いなどにささえられて堅調を続けており、とくに最近では中堅株にも人氣が広がっているのが目だつ。

国際収支は引き続き好調

11月の国際収支は、貿易収支が281百万ドルの大幅黒字(前月290百万ドル)となったうえ、長期資本収支も証券投資の流入増を主因に15百万ドルの黒字(前月赤字30百万ドル)となったため、総合収支の黒字幅は254百万ドル(前月187百万ドル)と好調を持続した。この間金融勘定では、為替銀行の対外短期ポジションが、輸入ユーザンスを中心とする外銀借入れの増加から、円シフトの進捗

にもかかわらず月中4百万ドルの改善にとどまり、外貨準備の月中増加額は242百万ドルと既往最高を示した(月末残高3,476百万ドル)。

貿易収支を季節調整後でみると、輸出が高水準横ばいを続けている一方、輸入は小幅ながら減少したため、貿易収支の受超幅は月中254百万ドル(前月248百万ドル)と引き続き相当の黒字基調を維持している。

11月の輸出は前年同月比では+15.0%と伸び率が低下したが(7~9月+25.0%、10月+20.0%)、これには前年の輸出が米国港湾スト見越しの積み急ぎからかなり高水準(43年11月は前年同月比+41.3%)であったことも響いており、季節調整後の前月比では+0.1%(前月+0.1%)となっている。通関ベースの輸出を前年同月比でみると、品目別には合繊織物、鉄鋼が引き続き高い伸びを示した反面、光学機器、肥料等は伸び率鈍化が目だった。地域別にはEEC、中南米向けが顕著な伸びを続けているが、主力市場の米国は前記のような昨年の事情に加え、鉄鋼が輸出自主規制枠の関係から著減していることもあって、前月来伸び率がやや低下しており、東南アジアも相手国の外貨事情などから伸び悩みを示している。なお、11月の輸出信用状接受額は季節調整後の前月比で+1.9%と増勢を続け、12月も好調に推移している。

一方、11月の輸入は前年同月比+20.2%、季節調整後の前月比では-0.5%と久方ぶりに増勢一服となった。これには、本年夏ごろ以降の輸入急増の結果、原材料在庫の回復が進んできていることもかなり響いているものとみられる。品目別(通関ベース)にみると、砂糖、鉄くず、非鉄金属等は値上がりも加わって高水準を続けているが、繊維原料、木材等は落着き模様となっている。先行指標である輸入承認額をみても、11月は季節調整後の前月比で-8.4%の減少となった。

(昭和44年12月26日)